



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（医学）
報告番号	甲第1460号
学位記番号	第1046号
氏名	川口 彰子
授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位論文の題名	<p>Group cognitive behavioral therapy for patients with generalized social anxiety disorder in Japan: outcomes at 1-year follow up and outcome predictors (全般型社交不安障害に対する集団認知行動療法：1年後の長期予後と治療効果予測因子の検討)</p> <p>Neuropsychiatric Disease and Treatment Vol. 9 : P. 267-275, 2013</p>
論文審査担当者	主査： 早野 順一郎 副査： 鈴木 貞夫, 明智 龍男

論文内容の要旨

【背景】

社交不安障害（SAD）は国際的に発症頻度の高い精神疾患である。認知行動療法（CBT）は SAD の治療法として有効な選択肢の 1 つである。

本研究は、日本人 SAD 患者のうち、全般型サブタイプに対するグループ CBT の 1 年後追跡における効果と効果予測因子の検討を目的として行った。

【方法】

単群の介入研究として行った。

2003 年 7 月～2010 年 8 月までの期間にグループ CBT に参加した 113 人の全般型 SAD 患者を対象として行った。

主要評価項目は SAD の自記式症状評価尺度である Social Phobia Scale/Social Interaction Anxiety Scale (SPS/SIAS) の 1 年後の得点とした。1 年後の治療効果予測因子の解析には混合モデルを用いた。

【解析】

113 人のうち、70 人が 1 年後の追跡を完遂した。

SPS/SIAS の得点は有意な改善を認めた。

1 年後の SPS/SIAS の治療効果サイズは intention-to-treat (ITT) 群で 0.68 (95% confidence interval, 0.41–0.95)/0.76 (0.49–1.03) 、完遂群で 0.77 (0.42–1.10)/0.84 (0.49–1.18) であった。

ベースラインでの年齢が高いこと、遅い発症、軽症であることが、良好な治療効果予測因子として同定された。

【結論】

日本における全般型の SAD に対しても、1 年後までグループ CBT の治療効果が維持されることが示された。治療効果サイズは西欧諸国における研究と同等であった。

ベースラインで年齢が高いこと、遅い発症、軽症であることが良好な治療効果予測因子として同定された。

論文審査の結果の要旨

【背景・目的】 社交不安障害（SAD）は社交場面における恐怖と回避を特徴とした頻度の高い精神疾患である。思春期早期に発症し、無治療の場合、慢性に経過し就労機会の喪失など、重大な社会機能障害を来す。認知行動療法（CBT）はある状況での精神症状を、気分-思考-行動に分けてとらえ、現実在即した思考や適応的な行動への変化を促すことで気分を改善させる精神療法であり、SAD の治療法として薬物療法と並び有効な選択肢の 1 つである。欧米では、SAD に対する CBT の治療効果は実証されているが、文化差が存在する日本での検証は不十分である。また、1 年以上の長期効果の報告は国際的にもわずかである。以上の背景から本研究は以下を目的として行った。①欧米で開発された CBT が、文化の異なるわが国でも同等の効果を認め、長期的にその効果が維持されるかを検証する。②CBT の効果予測因子の同定を行う。

【方法】 2003 年 7 月～2010 年 8 月までの期間にグループ CBT に参加した 113 人の全般型 SAD 患者を対象とする単群の介入研究を行った。主要評価項目は SAD の自記式症状評価尺度である Social Phobia Scale/Social Interaction Anxiety Scale (SPS/SIAS) の 1 年後の得点とした。113 人全員を対象とする intention-to-treat (ITT) 分析と、完遂者を対象とする completers 分析を行った。1 年後の治療効果予測因子の解析には混合モデルを用いた。

【結果】 113 人のうち、70 人が 1 年後の追跡を完遂した。SPS/SIAS の得点は有意な改善を認めた。1 年後の SPS/SIAS の治療効果サイズは ITT 群で 0.68 (95%CI, 0.41–0.95)/0.76 (0.49–1.03)、完遂群で 0.77 (0.42–1.10)/0.84 (0.49–1.18) であった。ベースラインでの高年齢、遅い発症、軽症であることが、良好な治療効果予測因子として同定された。

【考察】 文化的背景が異なる日本人 SAD 患者においても、CBT が有効であり、その効果が 1 年後まで持続することが示された。効果サイズは治療後よりも 1 年後でわずかに大きく、患者は CBT のスキルを治療終了後も利用できていることが予想された。また、治療反応不良患者群の予測が可能となったため、これら患者に対してはグループ治療中に個別に配慮が必要と考えられた。

【結論】 日本人 SAD 患者に対しても、1 年後までグループ CBT の治療効果が維持されることが示された。治療効果サイズは欧米諸国における研究と同等であった。ベースラインで年齢が高いこと、遅い発症、軽症であることが良好な治療効果予測因子として同定された。

【審査の内容】 約 20 分間のプレゼンテーションの後に、主査の早野からは、effect size の有意性の判断基準について、アウトカム評価として用いられた質問紙は実際の患者の行動変化を反映している根拠について、用いられた 3 種のアウトカム指標の必要性について、患者の包含基準について等、主として研究の方法論や結果の解釈などについての 8 項目の質問を行った。第一副査の鈴木教授からは、表 1 に記載されている P 値の確認、ITT 分析と completers 分析のコンセプトの違い、解析として混合モデルを用いた理由、連続変数をカテゴリー化した理由、多重検定の補正法があるがそれを用いなかった理由など、主として統計学的解析および結果の解釈などについて 9 項目の質問がなされた。第二副査の明智教授からは、統合失調症の診断基準と鑑別診断および認知症のわが国における疫学およびアルツハイマー型認知症とレビー小体型認知症の臨床症状および画像診断所見についての 2 つの質問がなされた。いくつかの質問に関しては若干窮する点もあったが、全体的には満足いく回答が得られ、学位論文の主旨を十分理解していると判断した。本研究は、わが国の社交不安障害患者に対する CBT の長期的効果と効果予測因子を同定したはじめての研究であり、意義の高い研究である。以上をもって本論文の著者には、博士（医学）の称号を与えるに相応しいと判断した。